

令和5年度

認定こども園大谷オアシス保育園 / 札幌大谷第二幼稚園 学校評価

(始めに)

両園は今年度、共通テーマ「本園のチーム保育の考え方を知り、日々の保育に理解を深める」を元実践を重ねてきた。保育園自己評価の「テーマの趣旨」に教師自身の「十分な自己発揮と他者の受容がより良いチームを築いていく・・・」と記されているようにひとり一人の教師が互いに良さを発揮し、尊重し合い、協力し合う関係でこそ園全体の教育力の向上につながる、という視点は重要である。

教師が明るく、互いを尊重し合い「子ども第一」の教育を目指す両園の姿は、チームとしての教師集団がこぞって、子ども達にとってよりよい環境であろうとする意志の表明と捉えることができる。

外部評価委員は、最終の評価委員会に於いて、両園から自己評価を聞き、質疑を重ねて評価項目の内容を確かめた。

☆ 両園が掲げる「チーム保育」とは「複数担任制とは異なり、役職や職種等の垣根なく園を一つのチームとして全教職員で全園児に関わる」という保育方針のことを指している。

以下が、外部評価委員による、それぞれの園に対する評価である。

認定こども園大谷オアシス保育園 学校評価

評価項目 I 「チーム保育」の考え方を理解する

入園前の親のほとんどがチーム保育への取組みについて知らず、園選びの際の参考にもしていなかった。また、チーム保育に関する事前の説明への関心も薄かったことがわかった。しかし、我が子への日々の保育と子どもの成長を目の当たりに約95%の親がチーム保育の成果を認め、評価しており、親のチーム保育への理解の深まりと併せて、高評価に結びついたり理解した。

一方で、チーム保育について全教職員が共通に理解できているのか課題の見えるアンケート結果であり、チーム保育の長所・短所の理解も含めて、さらに園内研修を重ねる必要性も見えている。

委員からは「チーム内での情報共有等、まだまだ伸びしろを感じる」という好意的な評価も示された。

本項目については、入園前の親への説明、教員間の更なる研修、と課題を提示した上で
評価 A⁻ (エーマイナス) とする

II 「チーム保育」に適した環境を整える

調査結果から、チーム保育に理解を頂くための「親への情報提供不足」が課題として見えた。一方で個々の子どもへの対応や発達変化等に関する教師と親とのコミュニケーションについては満足度が高く、全教員が個々の子どもと向き合っている環境に評価が高い。

本項目に関して親である委員からは「大変ありがたく、感謝したい項目」との意見があった。また、別の委員からは課題がはっきりしており、適切な情報提供によって次年度には改善可能との指摘もあった。

本項目、全体として高い評価であったが、上記情報提供不足を踏まえて

評価 A⁻（エーマイナス）とする

III 「チーム保育」による保育効果を高める

各項目、総て高評価であるが委員からは一部でも低い評価がある場合には、しっかりとそれに向き合う必要性も指摘された。

教職員自己評価において「自分の得意なこと、持ち味」の発揮について 35%が不満足の評価であった。委員からは「親から高い評価を得ている」ことから「低く自己評価している教員は、他が認めているのに自ら気づいていないのではないか」と推察し、園の歴史や日々の実践を振り返り、今後さらに教職員の個性・特性を生かした保育への期待が大きい、とした。

本項目、一部を除いて保護者からも教職員からも評価が高く

評価 A⁺（エープラス）とする

（終わりに）

園内の教職員ひとり一人は子どもにとって大切な環境である。自然・社会、そして物的環境にも増して重要視されるべきは人的環境としての教職員の姿である。最終評価委員会に於いては、このことに自覚的にひとり一人の教職員がチームを構成し、親への適切な情報発信を踏まえ、『ともに生き、ともに育ち合う』ことを目指した、子ども達の未来を育む保育への期待が膨らんだ。

これら全体を踏まえて、総合評価を A（エー）とする

評価委員 平野 良明
 廣田 和久
 向 航平
 菅原 一馬

札幌大谷第二幼稚園 / 認定こども園大谷オアシス保育園 学校評価

(始めに)

両園は今年度、共通テーマ「本園のチーム保育の考え方を知り、日々の保育に理解を深める」を元実践を重ねてきた。保育園自己評価の「テーマの趣旨」に教師自身の「十分な自己発揮と他者の受容がより良いチームを築いていく・・・」と記されているようにひとり一人の教師が互いに良さを発揮し、尊重し合い、協力し合う関係でこそ園全体の教育力の向上につながる、という視点は重要である。

教師が明るく、互いを尊重し合い「子ども第一」の教育を目指す両園の姿は、チームとしての教師集団がこぞって、子ども達にとってよりよい環境であろうとする意志の表明と捉えることができる。

外部評価委員は、最終の評価委員会に於いて、両園から自己評価を聞き、質疑を重ねて評価項目の内容を確かめた。

☆ 両園が掲げる「チーム保育」とは「複数担任制とは異なり、役職や職種等の垣根なく園を一つのチームとして全教職員で全園児に関わる」という保育方針のことを指している。

札幌大谷第二幼稚園 学校評価

評価項目 I 「チーム保育」の考え方を理解する

幼稚園に入園させている親の多くは当園の「チーム保育」を理解し、これに魅力を感じて選んでいることが分かる。親からは「複数の先生が見守ってくれていることで安心感がある」職員間では「苦手をフォローし合える」「色々な先生と学び合える」など両者から共に評価が高い。

一方、評価委員会では園長より「人任せ」になってはいないか、「複数の保育者の目」が油断にならないか、等、高評価に対して自戒の言葉が聞かれ、さらに高い評価に高い評価に結びついた。

本項目の評価を A+ (エープラス) とする

II 「チーム保育」に適した環境を整える

どの項目も保護者の満足度は大変高い。一方で教職員の約半数が「親とのコミュニケーションが十分でない」と考えている。親は、個々の子どもに関して「教職員は十分に教育してくれており、教職員皆さんからそのことが伝わってくる」と考えていることから、教職員が

自覚的に積極的に親とのコミュニケーションにおいて改善すれば、当園の教育活動をめぐる環境がさらに良くなると考えることができる。

委員からは教職員間のコミュニケーション、教職員と親のコミュニケーションのためには職員間の園内研修（OJT）や外部での OffJT の提案もあった。

また、委員会では個々の子どもの発達理解と情報共有に関して、当園の旧き実践であるカルテの活用なども提案・意見が出された。

いずれにせよ、親からの高い評価を踏まえて委員による評価は A（エー）とする

Ⅲ 「チーム保育」による保育効果を高める

教職員間で「耳を傾け合い」「互いにフォローし合い」「自分の得意を發揮し合う」、これらが「できている」「そう思う」教職員の姿を「チームとして団結して取り組んでいる」「職員の個性が發揮され良いチームが形成されている」と多くの親が大変高く評価している。

当園には一人二人では無理なことも「チームとして個々の特性を生かして補完し合う」というチーム保育の理念が教職員間、そして教職員と親の間で定着してきていることが理解できる。

チーム保育で少し見えにくくなっている個々の子どもの発達変化の見取りについては旧き当園の実践にヒントがあるのではないかと委員の意見もあった。

また、親からの記述意見の中に（3 - 10）子どもの様子を「教職員と話す機会が少ない」、「話ができている」という声が 18 件含まれていることの指摘をくださる委員もいた。

親からの高い評価と委員からの指摘や意見も踏まえ評価を A（エー）とする

（終わりに）

「1 クラス 1 担任制が主流の幼児教育環境の中で早くから『チーム保育』に取り組んできた当園には、保育者だけでなく園の職員や保護者も『チーム』として『子ども達を見守り、共に学び育ち合う』という願いがあった」。評価委員会に示された松田園長の最後の言葉に認められた思いと「これからの未来が争いのない平和な世界で子ども達が安心して幸せに暮らせるように・・・」と願う言葉に当園が開園以来求め続ける「理想の幼児教育」が読み取れる。

ICT が謳われ、インクルーシブ教育も問い直される時代に、人としての本質育てを見失うことなく、五感を通じた直接体験と育ち合いを掲げ続ける本園が、あえて大変な「チーム保育」に挑戦し続ける姿に、一部、厳しい指摘も行ったが、評価委員一同共感し、

総合評価を A（エー）とする

なお、両園共通で元会長の想いを記させていただく。

自分の子ども2人がお世話になっていた頃はお便り帳があり、月に1回、先生が交代で園での様子を書いてくれていた。それに対して保護者からの返信欄があり、私はその記載を担当していた。毎回全員保育でよくこれまで我が子のことを見ているなど感心していたので、毎月、大変感謝している旨返信していたことを覚えている。

子どもが大きく成長した今でも、親として、園への、先生方への感謝の気持ちは変わらない、そんな日委員の文を付記しました。

評価委員 平野 良明
 廣田 和久
 向 航平
 菅原 一馬